

## 新刊書紹介

### 海的环境微生物学

石田祐三郎・杉田治男編，恒星社厚生閣（2005年）/A5判，239頁，2,800円

温暖化，異常気象，環境汚染など，地球環境に対する関心が高まるにつれ，地球表面積の71%を占める海洋環境の現状，そして将来の海洋環境保全のあり方に，大きな注目が集まっている。本書は，海洋環境保全を考える上で必要な，海洋に棲息し物質循環を支える細菌や微細藻類などの役割を，最新の研究成果とともに丁寧にまとめた良書である。本書の前半では，海洋微生物の種類，栄養や代謝，外洋（低栄養環境）や深海（高圧低温環境）に暮らす微生物の役割，細菌と微細藻類の海洋物質循環への関わりなど，微生物学の基礎的事項を，具体的な数字と図を用いて分かりやすく説明している。また，後半では，海洋環境と微生物の関わりを実例と共に紹介し，第二次世界大戦後から問題となっている赤潮の被害を，その原因生物や漁業被害をもとに解説するとともに，磯焼けやサンゴ礁の破壊についても，その発生要因や生態学的側面について詳しく紹介している。さらに，わが国のみならず世界的な問題となっている，有機塩素化合物や内分泌攪乱物質（環境ホルモン），重金属や石油による汚染の現状とその被害についても説明されている。一方で，これら海洋環境の劣悪化に対し，海洋微生物を用いた環境修復（バイオレメディエーション）が試みられており，その紹介に多くの誌面が割かれているのも本書の特色である。環境修復は近年盛んに研究が行われている分野であり，環境微生物学を志す者にとって，問題点の整理から研究の潮流，そして遺伝子組換え体の拡散防止法に関する解説までが網羅された優れた入門書といえる。

本書はさらに，わが国の沿岸水域における衛生細菌，特に腸炎ビブリオの生態や，養魚場の有機物および抗生物質汚染に関する話題も取り上げている。食の安全は，環境修復に並ぶ重要なキーワードであり，食中毒による風評被害もさることながら，養殖魚の安全性についても消費者から厳しい目が向けられている。本書は，海洋微生物の観点から上述のように幅広い内容について記載されていて，海洋学や食品学専攻の方々にも広く一読を薦めたい一冊である。（北大院水 吉水 守）

### 毒物・中毒用語辞典

Anthony T. Tu 編著，化学同人（2005年）/A5判，368頁，本体4,725円

本書は，よく耳にする毒や中毒に関連する重要な用語を，要領よく手短かに解説したもので，以下に関連する約2,500語を収載している；天然毒（キノコ毒，植物毒，海産毒，昆虫毒，クモおよび節足動物毒，へび毒，トカゲ毒，細菌毒，カビ毒，放射障害），法中毒，毒物分析，ドーピング，慢性中毒，急性中毒，遺伝毒，神経毒，重金属・産業毒，食中毒，食品添加物，農薬，環境毒，有毒廃棄物，燃焼による毒，化学・生物兵器，薬および漢方薬による中毒，日用品による中毒，覚醒剤・麻薬・幻覚剤，麻酔剤，救急で出会う中毒，内臓諸器官を害する毒，皮膚のかぶれ，アレルギー症，花粉症，中毒の救急法，中毒学の一般原理（本書「まえがき」から）。このように，いずれも私たちの生活の身近にあり，日常生活や報道等をとおして，一度は体験したり，耳にしたものが取り上げられている。中毒患者への対応の仕方も説明されており，毒物や中毒に関する一般的な基礎知識を習得するには格好の辞典である。特記すべき点は，水産分野に関連するものが数多く収載されていることで，必要なものについては化学構造も付記されている。毒物学，中毒学において水産分野関係も重要な位置を占めている現れでもあろう。水産分野に関連する毒物や中毒をまとめた辞典は他に例がないことから，水産分野に携わる人にとっては，ぜひ手元におきたい辞典である。

編著者のTu博士は毒物学の大家であり，サリン事件を含む種々の毒物事件の解決などへの社会的貢献も深く，コロラド大学の同博士のもとで研究留学された日本人学者も多いと聞く。また，「現代化学」の誌上で長年，日本人学生・研究者に対して英語指導をされていたことは記憶に新しく，親日家でもある。本書が，Tu博士と，水産学をはじめ多岐の研究分野の日本人学者26名の執筆で構成されているのは，博士が親日家である由縁とも言えよう。

本書は，単に用語辞典としてだけでなく，一般書としての側面も内包しており，一般の人が気楽に読むのにも適している。厚さ2cm，ソフトカバーで装丁されており，片手でも読むことも可能である。カバーはシックなカラーとデザインからなり，書斎のインテリアの一つにもなる。 （広大院生物圏科 堀 貫治）